『新京図書館月報』からみる「満州国」時代の文化

李　　青

一　はじめに

『新京図書館月報』は金沢文圃閣（2009年）より復刻版として、出版された。旧満州国時代のことに詳しい師でありながら畏友の西原和海氏が復刻の出版に関わり、いち早く教えてくださり、目を通すように勧めてくださった。西原氏は復刻にあたって推薦文「首都のライブラリアンたち―満州国文化を読み解く」の中で、「〈満州の文化状況〉などといった昨今注目のテーマにおいて、そこに占める図書館の存在と意義の大きさは格別のはずだ。それは図書館に始まり図書館に終わる－そう極言してみたいほどなのである[(1)]」と書いている。

『新京図書館月報』は「満州国」の国都の図書館の館報として、ざまざまな文化情報を発信し、植民地時代の文化諸相を読み解くには恰好な、しかも、たいへん貴重な資料と言える。

1905年、日露戦争のロシアの敗戦によって、中国の東北部における覇権は日本に譲渡されることになった。1906年に日本は大連で「南満州鉄道株式会社」（略して「満鉄」という）を創設し、満鉄付属地への建設にも本腰を入れた。文化面においては、満鉄沿線に住む社員や日本人滞在者に精神的な的糧を提供するために図書閲覧場を登場させた。1910年に長春に「満鉄図書閲覧場」ができた。これが新京図書館の前身であり、現在の長春図書館である。1917年「満鉄長春簡易図書館」と改名し、1922年「簡易」という二文字を取り、「満鉄長春図書館」と名を改めた。1932年に満州国が成立し、国都を長春に置き、名前を新京と改めたため、同年11月に、図書館の名を「満鉄新京

(1)『新京図書館月報』［復刻版］金沢文圃閣、2009年４月。全三巻。カタログに本復刻版の推薦者の文章が掲載されている。西原和海の言葉は本カタログより引用した。

図書館」と変更した。翌年の1933年に新京は特別市となり、図書館は「新京特別市図書館」と名乗るようになったが、管轄は依然として満鉄にあった。

1937年に「満州国」内の治外法権は撤廃され、満鉄付属地の権力を国家に引き渡した。新京特別市図書館は新京特別市の管轄になり、1938年に新京館と合併し、「新京特別市立図書館」として、再スタートを切った。

本論では復刻版の月報の内容に基づき、関心事を項目に分けて見ることにしたい。

復刻版は三巻に分かれる。第一巻は12号（1937年８月）～42号（1940年６月）であるが、ただし、17号～23号は欠号である。第二巻は43号（1940年７月）～59号（1942年４月）である。第三巻は60号（1942年５月）～76号（1944年1.2月）であるが、ただし、66号５～８／13～16頁、75号は欠号である。

満鉄成立後に始終国策の機関として「満州国」の運営に携わってきた。文化事業においては、図書館だけでは沿線に31箇所を開設した。図書館は文化の伝播以外に、戦時中に政策の公布などで政府の代弁者の役割を果たしていた。満州国成立後、多くの政策が次から次へと公布され、図書館は政治、経済、文化、教育、社会、衛生、交通、産業への研究や政局への迎合や戦局翼賛などを担うようになった。

筆者は1937年～1943年の間に出された館報を中心に、そこに掲載された文学についての記事、館報に投稿した作者、図書館と「満州国」の中国人文芸団体との関わり、図書館のヴィジョンはいかなるものなのかなどについて考察してみたいと思う。

二　『新京図書館月報』から反映された中国人作家とその創作

まずは館報第12号（1937年６月）トップ記事が目を引く。「全国図書館大会の一行を迎へて」[(2)]（木下助男）では全国の図書館大会が満州の地で盛大に開かれたことを紹介した。「首都新京に於て開催されたことは、此の国文化史上誠に意義ある記念すべき行事であった」と大会の意義を強調しながら、「今回、日満図書館関係者並に其の共催機関の代表者が一堂に会し、忌憚なき意

(2)『新京図書館月報』　金沢文圃閣、2009年４月。７頁。本論が『新京図書館月報』より引用した内容は、すべて復刻版の総頁数によるものである。以下の注は同様。

見交換の機会が屢与えられた。そして、相互に其の認識を正する契機となったことと思う。吾等は其れが、何れ現実化するものと信じ、大なる興味を持つものである。(略) 日満国民の心理的距離を又一歩接近せしむるであろう」と図書館という文化事業を通じて、日満親善と両国民の心理的な距離を縮めようとしていることが窺える。とりわけ興味を引くところは「満州国」に圧倒的多数が住んでいる満人、いわゆる中国人たちはこの高らかに謳われている文化事業に対して、如何に関わったのか、図書館の利用状況、文学者たちの参与の度合いなどである。

1939年3月号第31号に「最近の満人図書館閲覧傾向[3]」(三島) の分析は興味深い。「日、満両国図書館の閲覧傾向は常に一致しているものではない」としながら、図書館利用の際に三つの特徴が見られると指摘している。第一に、「国都には是非日語が必要で、誰彼となく其研究熱は大変なもんで、何処の本屋でも日語本の売行が第一である」と。第二は「図書館の閲覧人の大多数は小、中学生で語学書も大変利用されるが、却って娯楽的な小説類や古代物で、青年層も一般的に見れば娯楽的図書が一番であり、例えば現代通俗小説類が最高で水滸伝紅楼夢、三国志演義が喜ばれる。何と言っても満人向雑誌、其里でも文学方面のものが少ないので、文学青年の指針を失った感あり、満州国文学不振の一大原因を作るのではないかと考えるのである。」第三の原因は「児童物で日本人の様な漫画的な三色刷は見られず、やはり絵入の八宝王、火焼紅蓮寺、大侠甘鳳池、連環図書三国志等の様な侠客物で当館蔵書中の此等の本はボロボロになり変色になる程多く利用されているのである」と述べている。

この三つの特徴からわかることは、「満州国」に中国人向の日本語の本が是非必要であり、中国人の日本語学習を増強すべきだというニュアンスを帯びていることである。それから、若い読者層に文学的な読み物が少なく、これが満州文学不振を招く原因の一つであるとまで指摘している点である。児童書の貧弱さも強調していた。「兎に角現代の小、青年は向学熱に燃えており、どんな図書でも手当たり次第読まれている状態である。其して今後どんどん良書の出版がなされるであろう。現在の此の過渡期の小青年に対する読

(3) 前掲書、第一巻、144頁。

物は如何すべきかも考察すべきであろう」と呼びかけていた。内容から見ても、青少年も児童も読める本はいずれも政治と無縁な無難な中国の古典物を中心とする物であり、敏感な時代を現す物はなかったようである。

これらの傾向を通して三島はさらにこう分析している。

> 此の満人図書館閲覧傾向に於て最もよく民族性又は国民性の一端を窺い得られるべきである、其れは常に変化する時代に応ずる小年、老年の心理的反応を赤裸々に見る事が出来る、そうして其の間を通じての伝統的民族性又は国民性と言うものが系統立てられて変わらないものがあると言う事を知らしめるものである。

しかし、上記の問題がどこまで解決したのかは、三巻の復刻版を通読しても、三島図書館員の呼びかけまたは喚起に大きな改善が見られていないのではないかと、筆者は思うのである。図書館に毎月入荷される本のリストや本の紹介などを見ても、そのほとんどは日本語の本であり、明らかにどれも日本人向けの物ばかりである。中国人ならば、よほどの語学力や教養がなければ、難解だろう。読書または文学という領域を通じて、「日満交流や親善」を謀ることはほど遠いような気がしてならない。

中国人による文学についての紹介や論評は少ないものの、中国文学の翻訳家で新京日日新聞社の大内隆雄による精力的な紹介が際だっている。1939年4月刊の32号には大内隆雄の「満人作家・その他」[(4)]が掲載されている。彼は冒頭に中国人文学者古丁の言葉を引用し、「満人作家の悉くが、官吏、会社員、学校教師等の何れかなのであるこの事は満州文学の幼なさを語る材料として語られがちである。そしてそれも事実には違いない」と古丁の言い分を肯定した。つまり当時の中国人による文学は「働きつつ書く－勤労者の文学である」ということである。大内隆雄はプロの文学者がいない満州文学の弱みを指摘しながらも、「私は少し違った考え方を持つようになって来た。この職業作家がいないということが、満州文学の一つの強味を示すものとなってもよいではないか。在満日本人もの場合にも言えることでもある」と持論

(4) 前掲書、第一巻、150頁。

を展開している。この理由として、「仕事を持っているが故に彼はこの社会の生産的な面と密接な関係を持続することが出来るのである。彼はその生活をそのためにこそいきいきと描き出し得る筈である」と述べている。

大内隆雄は中国人文学者の文学への理解について、「必要なことは彼等の作品を読むことではないか。それこそが満人作家について知る最も正しい道ではないか」と述べ、さらに言葉の壁を越えなければならないことについては、「支那文を解した人は翻訳に頼らねばならない。ところが、そういう翻訳は数少ない。—私は一層奮闘せざるを得ないわけである」と自ら中国語による文学作品の翻訳を広める決意を表し、近く東京の三和書房から満人9作家の作品12篇を集めた『原野』(1939年、三和書房)を出版することを披露したのであった。

三ヶ月後の7月35号の館報に大内隆雄は再び中国人の文学を紹介する「芸文志第1輯について[(5)]」を寄せた。

中国語の純文学雑誌『明明』(1936年－1937年)が停刊してから、「満州文壇」において、中国語の文芸誌はなく、「甚だ寂しさが感ぜられ」たと大内隆雄は当時の状況を振り返っている。このような凋落した状況の下で純粋なる中国人の文芸誌『芸文志』が1939年6月に誕生した。紹介によると、『芸文志』ポスターの文言には「満州文化の宝庫、新京文芸のサロン」とあり、大内はこのフレーズを「〈芸文志〉の持つ色彩なり、方向なりをうまく表現していると言えよう」と言っている。雑誌『芸文志』に集まる文学者たちは大部分が政府機関に勤めながら、文学に志す熱血青年だった。中でもリーダー的な存在をしているのが古丁だった。彼は「満州国」内で中国人文学者としてもっとも文学の業績が多い一人である。日本語に堪能なため、日本人文人との関わりが深く、政府が招集する各会合にもたびたび顔を出し、中国人の中で為政者と日本人と最も近いと言われていた。文芸誌『芸文志』に集まった同人には古丁をはじめ、他に爵青、辛嘉、少虬、孟原、疑遅、非斯、外文などがいる。「満州文壇」では、『芸文志』同人のことを「芸文志派」と呼んでいる。

大内隆雄文の紹介によると、雑誌の上梓は「〈芸文志〉は不定期刊行物で、

(5) 前掲書、第一巻、187頁。

芸文志事務会から発行される。芸文に関した創作及び紹介等を刊載することを以て目的としている。（中略）発行の実務は月刊満州社で」あるという。雑誌が順調に出版できるのは出版界の大物の支援があることは、月刊満州社社長の城島舟礼を監理長として、大内隆雄、杉村勇造などが参与していることからわかる。『芸文志』の特質を、大内隆雄は「第一にはそれが全く満人文学者の創意によってはじめられたものである点にあろう。第二には特定の主張などを持たず。ただ文化文芸のために創作し評論し研究するという真摯さのみを共通としている。包括的な、包容力ある刊行物であることである。第三には、この刊行物では、その発行の上に、また内容の上に、日本人側からの協力が行われているという喜ぶべきことである」とまとめている。雑誌を「堂々菊判二百二頁の大冊で、創作、詩、何れも現在の満州文学の最高水準を示すものであると言える」と絶賛したのだった。

「芸文志派」同人は『芸文志』の出版によって、名声が高くなり、文学作品を盛んに出版していた。1940年１月38号の館報に大内隆雄はまた「満系の文学回顧[6]」を寄稿した。彼は文章の中で去る一年間を回顧し、『新青年』と『芸文志』に触れている。「この刊行物によって現在の満系文学は代表されていると言える」と述べた。文章の中では個々の作家の作品を細かく紹介している。『芸文志』に匹敵する、奉天（瀋陽）で刊行予定となっている『文選[7]』紹介は興味深い。

大内隆雄は中国人文学の創作の特色を以下のように書いている。

> いま満系作家は「写印主義」ということを言っている写は書く印は印行するである。とにかく書いて発表することが大事だというのである。この主義によって旺んに書かれつつあるのが現状である。斯うした動きは今後愈よ旺んになって行くであろうと思う。

---

(6) 前掲書、第一巻、225頁。

(7) 1939年陳因、王秋蛍が瀋陽で“文選刊行会”を創建した。同人誌『文選』を発刊した。同人には梁山丁王秋蛍、袁犀陳因などがいる。梁山丁は『文選』の発刊誌で「現在の文学は群衆を教育する武器であり、現実を認識する道具である。我々は現実から避けることはできない」と強調した。古丁をはじめとする「芸文誌派」との主義、主張と真っ向から対立していた。

上記の「写印主義」は実は「芸文志派」の古丁が最初に提唱した創作精神であり、同人たちはほぼこの創作ルールに賛同し、黙々と創作に励んでいた。しかし、この精神に対して、後に形成された『文選』派に集まる同人たちに手厳しく批判され、文壇では盛んに論争が繰り広げられた。大内隆雄はこの論争を傍観者として「私などから見れば、もっと批判があってよいのだと思う。批判をすると直ぐ喧嘩になるというような初期的な段階はもう卒業したい。しかし一部に理由もない漫罵的批判が行われているのは事実で甚だ行かんである」と評論したのだった。論争の激しさから、一部は感情的になっていることを暗に批判している。

同号に『芸文志』と『文選』の雑誌紹介広告が並んで掲載された。

中国人作家のなかで日本語で雑誌に投稿する者が極めて少なく、珍しい。日本語に堪能な古丁はその知名度の高いこと及び「芸文志派」の活躍から、図書館編集の坂井艶司に頼まれ、1940年7月43号に直接日本語による「僕達の“芸文志”に就いて」[(8)]という原稿を寄せた。これは筆者が通読した本館報の中で唯一中国人文学者の手になる一文である。当時の「満州国文壇」において、中国人、中国語による文学は如何なるものなのか、彼らの文学主張は何なのかを理解するには、この古丁の短い文章が恰好な窓口と言えよう。

古丁は自分を含めた仲間たちが文学を目指しているのが「何よりも、僕達は夢を持っているから文学の有り難さが分かるような気がする」としている。現時点で自分たちが出された二輯の『芸文志』は「何処へ出しても恥ずかしくない」としながらも、「決して満足していない。寧ろ絶えず不満足を感じているのであって、よりよきものを作ろうと自らを励ましているのである。〈不知足〉は僕達の民族の〈知足者常楽〉という箴言に背くものである。僕達は〈不知足者常楽〉という箴言をでも創って見たいものだ」と絶えず努力する姿勢を明示している。〈不知足者常楽〉について解釈すると、自分たちがこれまで納めてきた成績を満足せず、常に向上心をもって、文学を極めたいということではないだろうか。

このほかに文芸雑誌『芸文志』のほかに、『読書人』、『読書文庫』の出版にも手がけ、盛んに文学活動をしていたことがわかる。

---

(8) 前掲書、第一巻、8頁。

中国人作家の作品をどう読まれているか、満州在住の日本人小説家秋原勝二は「満人作家小説集　第二輯　蒲公英」[9]（1940年９月45号）という題の文章で感想を述べていた。彼は小松の「蒲公英」を読んで非常に感動したことを記しながら、全体の作品は「類似性を感じさせられ、倦怠をおぼえる」と言っている。具体的に「どれ一つとして、例外なく苦しい、苦しい、作品ばかりでもある。重苦しい生活、とりかえしのつかない、傷ましい運命。作者たちの眼が一様に、こうしたものばかりに釘づけになっているのは、哀しいことである」と指摘した。何故中国人の作品にはこの要素が強いのかについては、秋原は翻訳者の大内隆雄に原因があるのではないかと言ったが、筆者は翻訳者の大内隆雄の素材選びに大いに関わっているだろうが、中国人作家が置かれていた社会状況、彼らの生活環境などの要因を考えると、ほかにも原因があるはずだと考えるべきであろう。この点に関しては彼らの作品を熟読してから、篇を改めて論を展開することにしたい。

翻訳家の大内隆雄は新人の創作にも目を配っている。1941年10月第55号に「満系作家の新人について」[10]を寄稿した。古梯、劉漢、姚遠の三人について作品とともに紹介した。紹介の経緯はおなじみの「芸文志派」の重鎮である古丁と爵青の推薦からだというであり、古丁たちの先輩作家による若手の文学成果とその名を広めてもらおうとの苦心が感じられた。ただ、新人たちの作風は「これまでの作家たちと似たようなものである。同じ流れに沿っていると言える。もう少し違った種類が出ることをも望む」と期待をかけた。

このような中国系作家や作品の紹介は太平洋戦争勃発後に館報から消えてしまった。一方、戦争後期になると、時局に迎合する書物の宣伝や紹介が多数見られるようになってきた。この時点から館報だけからでは、中国人作家の動向や彼らの創作活動を知ることが出来なくなった。

三　『新京図書館月報』から見られる特徴

第一に毎月号に「増加図書目録」がある。図書館の納書リストは項目に分かれ、毎月どのような本が納入され、本の出版傾向などが分かる。

---

(9)　前掲書、第二巻、56頁。
(10)　前掲書、第二巻、223頁。

第二に図書館司書の活躍である。坂井艶司はその中の一人である。彼は1939年に大連図書館から転入し、他へ転出されるまでの間に館報の編集を担当していた。新京図書館在職中に文学に関する書評や関連掲載が多かった。これは彼と彼の同僚たちの文学志向が大きく関わっていたことと言えよう。坂井艶司自身は文学的な素養が高く、評論家としても詩人としても活躍をしていた。『作文』の同人としても名高い。今後は坂井艶司を読むことによって、新たな発見を期待したい。

第三に毎月の館報に必ず「筆者紹介」欄を設け、執筆者の紹介から所属が分かる。図書館はどのような社会地位の人に注目し、どのような肩書きを持っている人が投稿するのか、図書館が彼らを起用することによって、国家の使命を担う国都図書館の性質を垣間見ることができよう。この他に、図書館関係者の人事異動（転入転出）は「編者後記」に随時公表されるため、どの時期に誰が館報に関わったかがよくわかる。実際には、館報の特異性も直接編集に携わった図書館員の志向によって、微妙に変化することが感じ取られた。

四　おわりに

1937年は新京図書館は節目の年だった。この年の７月13号の館報のあとがきから「本号から新京図書館月報と改題し発行期日を十五日にした」と記していた。筆者はおおよそここから復刻版を通読して、館報からどのように中国人文学者たちの作品を扱っていたのか、中国人作家たちの創作を日本人社会からどう受け止めていたのか、中国人文学者たちは政府の館報を通じて、何をアピールしたかったのか、彼らの主義・主張は何なのかを垣間見ることができたような気がする。翻訳家の大内隆雄は若手の中国人の作品を精力的に翻訳していた。彼の解説などによると、日本人社会と中国人社会に言葉の壁が厚く、原語のままでは、読まれることが難しいようである。ほかに「満人文学」を評する数編を見ても、いずれも大内隆雄が翻訳し、出版した本に基づいたものばかりである。なお、立場上日本人に近い中国人グループの紹介・宣伝が目立つように思えた。例えば、「芸文志派」に費やしていた紙幅が大きいと言えよう。

1937年から1944年（欠号を除く）までは足かけ７年間の『新京図書館月報』

に目を通してきた。短いようであるが、そこに実に多くの出来事があった。図書館報という薄っぺら冊子から、「満州国」の様々な側面を透視し、納書のリストの変化、書評などから時代の移り変わりも見てきた。

館報で紹介されていた文学作品に未発見の物も未読のものも多数ある。館報についてはまだ理解が浅く、今後は文学作品を精読することを通じて、もっと時代を正確に把握したい。なお、欠号の発見に努めながら、「満州国」在住していた日本人文学者の実態に迫りたい。

（本学教授）

参考文献：

1　長春図書館 HP　http://www.lib.cc.jl.cn/

2　『日本の植民地図書館　アジアにおける日本近代図書館史』加藤一夫、河田いこひ、東條規　共著　社会評論社　2005年５月